



令和3年度

鹿児島県の教育

12月号

巻頭言



一般財団法人鹿児島県校長会館理事
県連合校長協会高等学校長部会副部長

現在・過去・未来

池田 浩 一
鹿児島県立甲南高等学校校長

「前回のオリンピック開催時の思い出を語れ」一学期の終業式で生徒に投げかけた命題である。その後、自分が続けた思い出は、五年前に同様に、全校生徒の前で話した「次のオリンピック開催時の想い」と、現実とのギャップだった。リオの閉会式で、マリオに扮した首相が受け継いだバトンは、四年後ではなく五年後に引き継がれた。その当時、自分が生徒に話していた未来予想図の一部は、「オリンピックの年からセンター試験が変わり、国数への記述導入がなされ、英語の外部試験利用が始まる」「オリンピックの年に鹿児島で国体が開かれ、高校生も含めて多くの県民が関わる」といったものだった。実は予想ではなく、既定事項の紹介だった。ところが、両方ともそうはならなかった。

この原稿執筆中の九月末現在、二か月前に描いていた学校行事に対しても、変更の連続での悪戦苦闘中である。体育祭や文化祭がその名称を用いての実施ができず、全校生徒揃わない形での開催を工夫した。この後も行事研究発表会・薩摩半島縦走・甲南塾など課題も連続して予定されておき、単純な時期をずらすことなどでできず、その持ち方を工夫しながら実施せざるを得なかった。苦渋の選択してくれた集中力の高さは、改めて感心させられるものだった。来場を楽しみにしていた保護者に対しては、ブログでの発信等で補った

が、残念な部分は否めない。しかしながら、こういった状況の中で、改めて感謝と共に可能性を感じる場面も多かった。理念を胸に、現実に直面しての対応を積み重ねようとする職員集団と、それに対応する生徒、そして、保護者など。二教室での分散授業をすすめる中で、全ての二教室を映像回線で結ぶ工夫や、課題研究のグループ作業をネット上で行い、在宅時も繋がる工夫なども行われた。ただ、職員室等で添削・面談の直接的指導でより効果を出していることには変化はなく、ハイブリッド型が望まれることに間違いはない。

さて、表題の「現在・過去・未来」は、世代的に「迷い道くねくね」と繋げてしまいたくなるのだが、そのスパンでイメージが異なる。生徒たちの未来を中心に考えれば、長くなるべきだが、前述の学校経営のように短いスパンで考えなくてはならない場面も多い。ただ、共通するのは、現在という点の連続でしか未来はあり得ないということだ。現在の何が未来を変えるのか、当然、その予想のためには、過去と現在の関係性を検証する必要があるからこそ、未来をいかに受け継ぐべきかがあるから。変えるべきある形を考へ行動するリーダーの育成「地球規模でもに近さも求めていることと同様、時間軸の在り方も多方向の意識が必要かと思う。近い未来の成否もだが、その先の豊かな未来のための時間を積み重ねていきたいものである。

令和3(2021)年 12月号

一般財団法人 鹿児島県校長会館

〒890-0056 鹿児島市下荒田四丁目32-13

振替 02030-1-3192

TEL 257-9676 FAX 257-9679

(有) アート印刷

鹿児島市東坂元二丁目29-1

TEL 247-1605 FAX 247-2844

* おもな内容 *

巻頭言	1	話のひろば	13
随想	2	読書案内	15
提言	3	趣味・文芸	18
わが校の学校経営	5	郷土の紹介	19
子どもが輝く教育	7	一般財団法人校長会館だより	20
心に残るひとこと	9	編集後記	20
ある日の校長講話	11		



「川内川あらし」を 教材としてご利用ください

せんだい宇宙館館長 今村 聡

略 歴

平成七年三月 広島大学理学部地学科卒業
平成七年四月 株式会社 ドッドウエル
ビー・エム・エス(現 あ
いホールディングス 株式
会社)に勤める
NHK鹿児島放送局で
気象キャスターを担当
令和二年 現職

寒い時期、放射冷却が強まった朝は、鹿児島県の川内川流域では霧が発生することが多くあります。それら霧が発生する場所では風が弱く、一見すると霧はほとんど動きがないように見られます。一方、川内川の河口付近では強風を伴って霧が勢いよく海に流れ出すことがあります。これを「川内川あらし」と呼んでいます。この光景は霧がまるで白蛇が地を這うかのようにふるまい、そして、海では「けあらし」が数キロメートルにわたって広がる壮大さで、見る者を圧倒する迫力です。

これと同じ現象は、一級河川においては他に二か所で確認されています。愛媛県大洲市を流れる肱川の河口付近で見られる「肱川あらし」、そして、兵庫県豊岡市を流れる円山川河口付近で見られる「円山川あらし」です。これらを総じて「日本三大川あらし」と最近では言われるようになりました。日本でたった三か所で見られない貴重な自然現象ですので、世界自然遺産を目指して市民レベルでの活動が始まっています。

しかし、奄美・沖縄の世界自然遺産取得の例をみますと、その道は大変険しく、大変な時間がかかることから、次の世代に紡ぐ試みである

と認識しております。

さて、「川内川あらし」ですが、実はこれまでで詳しい調査・研究がなされたことがありませんでした。「肱川あらし」や「円山川あらし」は数々の論文がでていまして、それらを照らし合わせると、ある程度の発生メカニズムが類推されるのですが、それはあくまで推論にすぎません。そこで、「川内川あらし」の発生メカニズムを解明すべく、去年から公立鳥取環境大学准教授 重田祥範さんが薩摩川内市の川内川流域の約二十か所に観測機器を設置して観測を始めた。また、川内川あらし協議会も昨年からは独自の気象観測機器を設置して観測を始めて、ようやく観測体制が整ってきたところ。このような気象観測データは一般の方々からリアルタイムで見ることができませんが、「川内川あらし」が発生した時、もしくは霧が発生した時ほどのような気象条件だったのかということカメラで撮影した写真と共に見ることが出来ます。データ取得の期間は短いのですが、これまでに数々の有益な情報が得られてきております。例えば、これまでは川内川上流から下流へと霧が流れ込むということが定説となっていました。実際には上流で霧が発生しなくとも「川

内川あらし」が発生することがデータから分かってきました。このような生の観測データを活用して理科の教材に活用すれば、生徒たちの興味がより湧くことにつながるのではないかと考えております。気象データや画像は無償で提供しますので、ご入用の学校がいらつしやいましたら川内川あらし協議会の今村(執筆者本人です)までご連絡いただければ幸いです。また、双方のスケジュールが合えば、出前授業をさせて頂いたことも可能です。各種気象データをひもとくことで、この気象現象を解明するのは、ひよっとしたら生徒さんかもしれません。ちなみに、肱川あらしの調査には地元の高校生がメカニズム解明に寄与しました。

私は現在、せんだい宇宙館という天文施設で働いておりまして、多くの子供たちとふれあう機会がございます。子供たち、いや大人もそうですが、実際に自分の目で天体観測を行った時の目の輝きようは格別です。そして、そこには感動があります。先にも述べましたが、「川内川あらし」は次世代に紡ぐものです。より多くの子供たちに「川内川あらし」を知ってもらい、調査・研究を通じて感動してもらえればと願っています。



快適な職場環境づくり

永利小(北) 畠野 裕 昭

一 整理整頓

若い頃に御世話になったある校長は、常に「整理整頓」を実践しておられた。今では珍しく、ちゃん付けで職員を呼ばれる校長だった。「畠野ちゃん、整理整頓の意味が分かいな？」と問われ、「きれいにすることです。」と適当に答えると「整理とは、いらぬ物を捨て、整頓は、どこに何があるか分かるようにすることじゃっど。」と若造の適当な回答にも腹を立てず、笑顔で語ってくれたことが今でも心に残っている。

その校長は、赴任してすぐの五月の連休から、校長室にシュレッダーを持ち込み、様々な文書の廃棄に着手された。校長室の大型金庫二つに入りきれない程あった文書が、一つの金庫に収まったときは圧巻だった。「ほらあ、見てみよん。」と汗びっしょりの顔で語る校長の横顔は、どこか満足げだった。おかげで金庫を開けてから書類を探す手間も減り、職員からも大好評だった。

また、その校長は文書ファイリングも素晴らしかった。私が「校長先生、あの件について」と質問に行くと、「校長がさつと後ろの整理された戸棚からスツと一つのファイルを取り出し、バラバラとめくって、「はい、ここ。○行目に書いてあるよ。ほらあ。」と即答されることが多かった。すぐ探してくださるので、つい甘えて何でも聞きに行っていると、「まずは自分で、けしんかぎい探してみよん。それでも無いときはいつでも来やんせよ。」と諭されたこともあった。今思えば恥ずかしい限りである。しかし、その文書ファイリングのあまりの素晴らしさに感動した私は、その

二 書類整理編

校長に、どうしたらそんなに早く文書が探せるのか教えを請うた。すると「畠野ちゃん、俺もファイリングで苦労したのよ。じゃっどん、その中で自分のやり方を見つけたのよ。畠野ちゃんも苦労しやんせ。」と、けんもほろろな回答だった。

あれから職場や職種が変わる毎にファイリングの大切さや、文書廃棄の必要性が身にしみて分かってきた。ましてやこの「働き方改革」の御時世で快適な職場環境づくりは管理職としても見逃すわけにはいかないポイントであろう。

昨年度、薩摩川内市の校長研修会で、職場環境づくりに関心に取り組まれる先輩校長の実践発表を伺い、自分の中でスイッチが入った。

まず、金庫の中の指導要録や健康診断票、出席簿を整理した。先輩校長の真似をして学級毎にフォルダを購入し整理した。金庫に入れるべき書類以外の物は全て金庫から出した。

この結果、どの学級が持ち出しているか一目で分かるようになり、探す手間も省けて職員からも好評だった。金庫の中も余裕ができた。

次に、過去の指導要録の二十年保存の学籍と五年保存の成績関係に分け、廃棄年度毎に紐でくくった。一目で廃棄年度が分かるように見出しを工夫した。今後、誰が見ても廃棄するべき時期が一目で分かるはずである。その他、学校管理規則で定められている保存期間を過ぎた文書等は確認しながら全てシュレッダーにかけた。

さらに、過去五年分の報告文書や公文、会計簿等を年度毎に棚に整理し、年度が進む毎に一つの

三 空き部屋片付け編

棚を空にしていくことで、五年経ったら廃棄するサイクルが完成し、誤廃棄の可能性を減らすことに成功した。

どの学校を経験しても思うのだが、倉庫化した空き部屋が複数あり、ただでさえ部屋が足りない状況なので、いつももったいないと思うし、片付けずにはいられない性分である。

自分の場合、まず、「整理」から入る。奥の方には十年以上も前の雑誌や壊れた教具等が埋もれていた。保存期限を過ぎた液体が容器から漏れていた。それらを全て引きずり出し選別及び整頓した。足の折れた机などは修理が難しいので分解して燃えないごみに出した。

一番苦労したのは残った使えないペンキだった。結局専用の凝固剤で固めて中身を空にしてごみに出すことで解決した。月一回しかない燃えないごみの日までに整理した。ごみ回収業者がその量に驚いていた。

その結果、準備室が片付き、倉庫から今では初任研室に変わった。また、別の部屋を片付けていると、職員が横になれる畳部屋が出現した。保健室で使っていたソファベッドを持ち込み、休憩室として現在は活用している。

面白いのは、私が整理整頓の作業をしていると先生方が見に来たり、真似して整理したりしようと職員が必ず出てくることだ。職員がみんな学校をきれいにすると、子供も職員も楽しく過ごせる学校ができ上がることだろう。

結局、自分は「整理」が好きだし、その学校で「整理」するために来ているのだとさえも思うようになった。ファイリングは、まだ、あの校長の足元にも及ばないが、自分の場合、定年が六十五歳となり、若い先生と接する時間も一層増えそうなので、いつか「○○さん、文書の管理と整理整頓ってね・・・」と語れるようにさらに精進していこうと思う。



秋の日のつれづれ

「百尺竿頭も甚だ困難だが、更に一步を進む精神を醸成したい」

種子島中央高 古江龍二

コロナウイルス感染拡大の中、令和三年度は幕を開けたと語らざるを得ない。巷では東京オリンピック・パラリンピックの開催是非が声高に叫ばれ、折角の全世界的スポーツイベントが悲しい結果に繋がらないことを祈るばかりであったが、蓋を開けてみれば日本選手のメダルラッシュが、暗いニュースばかりが耳に障る昨今を大分明るくしてくれたようにも思う九月である。優勝インタビューその他で、「誰よりも練習した。その思いがメダルに繋がった。」との台詞を何度か耳にしたように思うが、何とも素晴らしい言葉である。『ビリギャル』を執筆された坪田信貴氏が「実際の、精神は肉体を凌駕するんです。」と語る場に居合わせるチャンスをいただいたことがある。前述の台詞は、練習による肉体的進化以上に誰にも負けない練習量という精神的矜持が、苦しい瞬間の自己を手助けしてくれて勝利へと導いてくれたのだという言葉であったように感じられてならない。

一方で、メダルに手が届かず涙が止まらない選手もまた大勢目にはせざるを得なかった。「二位では駄目なんですか?」の台詞も頭をよぎるが、私などからすると十分立派で素晴らしいと思われる選手が涙を流し、次への努力を口にす

る瞬間にはただただ頭が下がるばかりであった。

『景德伝灯録』という書物がある。その中に、「百尺竿頭に須く歩を進めて十万世界は是れ全身なるべし」という一節がある。この言葉は唐の時代、景岑(けいしん)という方の言葉だが、この言葉から「百尺竿頭に一步を進む」という諺が生まれている。これは、努力に努力を重ねて高い目標に達した後でも更に努力して工夫を加えることを意味する諺である。百尺つまり約三十メートルもの高さにある竿の先から更に一步進めるような努力、折れない・留まらない精神力の顕現たるチャレンジ精神の言葉であると言えるように思う。一流アスリートと呼ばれる方々の意識とはこのようなものなのだろう。経験則から裏打ちされた現在、そして未来へと向かう姿勢、我々学校関係者も含めて学ぶべき姿勢を意識させられたこの夏であった。

学校現場においては新しい時代が目前に迫っている。喫緊の課題となってしまうオンライン学習の在り方、高校では次年度から新学習指導要領が実施され、スクールポリシーの策定も待ったなし。成人年齢の引き下げによる課題も未だはつきりしないところが大きい。教育課程

について考え始めると頭が痛くなってくる。

いづれにせよ、校長が中心となって、新たな時代に即応した望ましい学校経営を模索していく必要があることは間違いない。過去をベースとして、新しい世界に挑んでいく姿勢を構築していきたいものである。そのときに求められる素養こそ、更に進まんとするチャレンジ精神なのだろう。今年の大河ドラマ「青天を衝け」、主人公の渋沢栄一は「すべて形式に流れると精神が乏しくなる。何でも日々新たにという心掛けが大事である。」という言葉を残しているというが、学校現場においても、得てして前年度の踏襲に流れてしまう場面を否定できないことも多いように思う。過去に確立した素晴らしい取組を否定する気は全くないが、時代とともに求められる姿は変化が必要があることもまた間違いない。校長として、学校を活性化し地域に愛される学校であるために、検証と挑戦を忘れないよう心掛けたいものである。

校長が替わると学校が変わるという言葉もよく耳にするが、変化を目的とするのではなく、結果としての変化を期待すべきことは言うまでもない。「かんじんなことは目では見えない」、様々な場面で心に響くサン・テグジュペリの台詞は含蓄多いが、ここではチャレンジ精神になるのかなと思うことである。

筆に任せて駄文を綴らせてもらった。最後に、やはり渋沢栄一の言葉で筆を擱かせていただくことにする。

「すべて世の中の事は、もうこれで満足だというときは、すなわち衰えるときである。」



大きな夢の実現のために 心豊かで、たくましい丹波の子を育てる

丹波小(南) 福島 慎一

一 はじめに

本校は、指宿市の南東部に位置し、東は錦江湾に面し西に山麓が広がり、気候は温暖で海紅豆、ハイビスカスなどの熱帯植物が咲き、ツマベニ蝶生息の北限の地でもある。子供は素直で明るく伸び伸びとしていて高学年を中心に委員会活動やボランティア活動に積極的に取り組んでいる。学級数は二十学級(特別支援学級四学級)、児童数五百二十五人の学校である。学校教育目標である「大きな夢の実現のために心豊かで、たくましい丹波の子を育てる」を実現するために三十九人の職員が一丸となって日々の教育活動を行っている。

三 教育目標達成のための取組

(一) 丹波プロジェクト

にした教育活動を保護者や地域と協力しながら充実していくことで、落ち着いた学校・学級で豊かな心を育みながら、学校が楽しいと感じられる子供を育成していくことを目指し、今年度はキャップレーズを「子供の幸せ(学校が楽しい)」を願い、保護者や地域の期待に応える丹波小学校」と設定して学校経営を推進している。

丹波プロジェクトでは総合的な学習の時間を活用し、指宿市が推進している指宿まると博物館構想に基づく、ふるさと「指宿」を素材とした学習内容である「いぶ好さふるさと学」に取り組んでいる。

このプロジェクトは「自分を生かし郷土を見つめる子どもの育成」を大テーマとして三年生～六年生までがそれぞれの目標やテーマに沿って学習を進めている。学習を進める中で各学年ごとに、地域の事業所や学校応援団の方々に講師やお手伝いをお願いすることで子供たち自身が地域の方々と直接触れ合う機会があり、地域全体で未来

を担う子供たちの学びや成長を支えようとする雰囲気を感じる。また、小中一貫教育の取組として六年生は中学校との交流学习も実施している。

(二) 校内研修を通じた指導力の向上

教育目標の達成のためには教職員の指導力の向上が欠かせない。そこで、PDCAサイクルを生かした継続的・累積的な研修を目指し、毎年「校内研修のまとめ」の冊子を作成し、新年度に新たな職員が共通理解を深め、四月からスムーズな研修が展開できるようにしている。

授業の実践に当たっては、みんなで授業づくりを進めるために授業者に対して全職員が資料や情報を提供し、学習指導案作成に協力している。学習指導案検討会や模擬授業を複数回実施することで「授業の見どころ」などの視点の共有化を図っている。また、実際の授業では授業記録やビデオ・写真の撮影、付箋紙の記入など一人一人が役割を分担し主体的に参加している。授業研究でもグループ討議を取り入れ、常に全員態勢で取り組んでいるので毎回活発な議論が繰り広げられている。

四 おわりに

学校教育目標達成のために、教育課程の編成や教職員のスキルアップという面で二つの例を紹介したが、多くの教育活動の中で何事にも職員が一丸となって取り組んでいる様子が見られることに、頼もしさを感じている。

二 学校経営の方針

これからの社会は、「知識基盤社会」「多文化共生社会」「情報化社会」など、変化がますます激しくなってくる。こうした社会を生き抜くためには、問題を解決するだけではなく、他者と共に新たな価値(学び、生き方、考え方など)を創造していく子供を育てていくことが大切である。

このことを踏まえて、教育目標や校訓を基



当たり前のことを

当たり前にできる学校を目指して

安楽小(隅) 横 峯 健

一 はじめに

本校は、「志」あふれるまち、志布志市の南部に位置し、創立百四十七年、全校児童二百二十九人の中規模校である。志布志市は、令和三年に志布志都城道路や東九州自動車道が整備・延伸され、近隣市との交通のアクセスが便利になっている。校区は、市街地から北に位置する標高三十mほどの丘陵地にあり、住宅地が増え、それに伴い児童数も増加傾向にある。また、自然の風物や史跡等も多く、天智天皇がお手植えされたと伝えられている山宮神社の大クス(国指定天然記念物)や銅鏡「唐草鴛鴦文様一面(国指定有形文化財)」、安楽城跡等がある。

二 学校経営の方針

本校の教育目標は、「自ら学び、考え、行動し、心豊かでたくましく生きる安楽の子どもを育てる」である。この目標達成に向け、全教職員の学校経営参画の下、「三つの当たり前」を掲げ、どの子供にも分かる・できる喜びや伸びる喜び、達成感を味わわせることができる学校づくりを目指している。

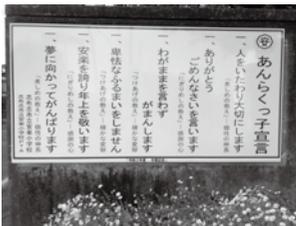
【三つの当たり前】

- 一 全教職員が普段から一時間の授業を大切にします。
- 二 学級づくりは、全ての教育活動の基本に考えます。
- 三 教育の対象は、かけがえのない子供たちであることを常に意識して取り組みます。

三 目標達成のための取組(特色ある活動から)

(一) 規範意識の醸成

六年ほど前に子供の規範意識を醸成し、落ち着いた学校づくりのために、学校とPTAが共同で「あんらくつ子宣言」を作成した。正門横や体育館、各教室に掲示し、朝の会、帰りの会で復唱するなど、子供が言える・分かる・できるようになるために意識付けている。生徒指導の際や道德の時間に「あんらくつ子宣言」と関連付けながら実践化を目指



(二) 個に応じた指導の徹底

基礎・基本の定着や応用力の向上のため、「若草タイム」と「楠の子タイム」を設定している。「若草タイム」は、毎週二回朝の十分間で、学校で自作した漢字力・計算力テスト等に取り組んでいる。「楠の子タイム」は、月一〜二回、応用問題を中心に、少人数による指導に当たっている。昨年度までは全学年を対象に指導を行ったが、今年度はよりきめ細やかに指導できるように、四年生以上を重点的に指導している。

(三) 学校運営協議会の充実

地域とともにある学校づくりを目指し、平成三年度から学校運営協議会が設置された。熟議と協働をキーワードに協議がなされ、これまでに、児童が安全に登下校できるようにガードレール設置について市への要望や見守り隊の設立、学力向上のために漢検の取組等、成果を挙げている。また、協議の結果を「安楽CS通信」にまとめ、地域住民にも広報を行っている。

四 おわりに

時代の急速な変化に伴い、学習内容も多様化してきている。その流れに対応していきける子供の育成に向けて、本校でも外国語活動や特別の教科道德、プログラミング教育等を推進していくとともに、今一度足もとを見つめ、不易である当たり前のことを当たり前にできる学校、安心・安全でみんなが楽しい学校づくりに職員一丸となって取り組んでいきたい。



授業が変わる、教師が変わる

玉江小(市) 田邊 源 裕

一 授業で輝かせたい

子どもたちが学校で過ごす大半は、授業である。私は、常日頃から、授業で子どもたちを輝かせたいと思っている。

二 授業を変えたい

昨年、本校に赴任した。教師主導の授業が気になった。すぐに、授業を子どもが意欲的に取り組み、子ども一人一人が輝く問題解決的な学習に変えていこう、と職員に呼びかけた。まずは、私が大好きな社会科の授業を提供した。すると、自ら授業を公開する職員も複数人出てきた。研修係からは、問題解決的な学習に関する研究通信が頻繁に出されるようになった。研修係とは、これからの玉江小の授業改善について、よく語り合った。

しかし、一方で授業の変わらない者もいた。授業の二極化が生じていた。

三 天からの贈りもの

この現状を何とかしたい。そこに、降って湧いたようにきたのが、令和三年度全国小学校道徳教育研究大会鹿児島大会会場の話であった。三つの学年で、授業提供してもらえないか、という話であった。私にとっては、正に渡りに船であった。な

五 教師が変わる ～自ら動き出す～

せなら、道徳は、すべての学年で行われるとともに、「特別の教科道徳」として再スタートしたばかりで、学び甲斐のある教科でもある。また、私の理解では、「特別の教科道徳」は問題解決的な学習を学べる教科でもある。道徳を学ぶことで、他教科への波及効果として授業改善に結びつくと考えた。すぐに、研修係、教務主任、道徳主任に相談した。「おもしろい、やりましょう。」と即答だった。その後、学年主任等にも話をして確認をとった。

本校は、十年以上、研究指定を受けていなかった。研究に飢えている者も少なからずいた。その後の職員会議では、会場校を受けることが、すんなりと決まった。

四 舵を切る

会場校を引き受けたものの、学校としての道徳の研究は皆無だった。この年は、国語の研究の二年目で「書く活動」をテーマに取り組んでいた。しかし、ここで、道徳に大きく舵を切ることができたのは、研修係と道徳主任の力に因るところが大きい。二人で論のたたき台を二か月で作り上げてきた。

六 教師が変わる ～ベクトル合わせ～

年度が明けた。全国大会に向け、目指す授業像も設定できた。

また、研修係を中心に、三つの班の班長がチームリーダーとして、目標達成に向けた働きかけを行い、プラスの相乗効果が生まれてきた。まず、週一時間の道徳の授業について、学年会で教材研究を行い、個々の担任が授業をし、次の学年会で振り返り、次の道徳の授業に生かす授業改善のPDCAサイクルが始まった。また、学年の枠を超えて、相互に参観し、よりよい授業を目指す機運も高まった。道徳を通じた、他教科への授業改善の基盤づくりである。波及効果が徐々に出てきた。

七 子どもが輝く

この原稿を皆様ご覧になる頃は、全国小学校道徳教育研究大会鹿児島大会は終わっている。今はただ、大会当日、玉江小学校の子ども一人一人が輝くことを願いたい。

授業が変わる、そして、教師が変わる。そうすれば、必ず子どもは輝くはずである。



「きょうどう学習」の学び

赤木名中(大) 森 真里子

一 はじめに

本校は、奄美大島の北部に位置し、奄美空港が校区にある。六つの小学校区から通ってくる生徒数百人の学校である。校区の小学校は極小規模校もあり、多人数の授業で『発表し多くの級友に認められる』という経験が少ない生徒も入学してくる。そこで、本校では、平成二十八年度から「きょうどう学習」の学びについて、全職員・全校生徒で取り組んでいる。「個」が認められ、称賛される場面を設定することで自己肯定感が高まり、生徒一人一人がキラリと輝く教育活動が実践できると考えるからである。

二 取組についての考え方

- (ア) 自己肯定感を高める活動
生徒が学級や生徒会、部活動など様々な集団活動の中で、お互いに認め合う活動を通して、自信をもって積極的に取り組む態度を育てる。
- (イ) 主体的に学習に取り組む活動
生徒一人一人が、学習課題に対して既習の知識及び技能や思考力・判断力・表現力

等を活用しながら最後まで取り組もうとする態度を育てる。

(ウ) 共に学び合う活動

自分の考えをもちながら、他者の考えも受け入れ、新たな知識や技能を見いだしたり、発展的な思考につなげたりしながら、考えを深める態度を育てる。

三 本校の生徒は

あなたの学校の授業の特色はと問われると『きょうどう学習』、キャッチフレーズは『文武両道』と生徒は、胸を張って答えると確信するほど本校生徒に浸透している取組である。しかし、自信をもって答えるが具体的にどんな取組をしているのかと問われると、「自分の活動は」「赤木名中学校の実際は」と答えられる生徒は、どれくらいいるのだろうか。学校の取組には自信をもっているのだが自分の取組については、やれているのに堂々と発表できない。自信がもてない。根拠となる活動や意気込みを論理的に話せない。それは自己肯定感の低さから来るのかもしれない。褒められる喜びで様々な事に挑戦し成功

体験を積み重ねていた幼児期、中学生になり周りが見えるようになると褒められることを素直に受け入れられなくなる。それが成長の過程なのかもしれないが、まずは、自分で考えてみよう、隣の人の意見を聞いてみよう(自分の考えと比べてみよう。自分と違う考えなら、どうしてそう思うのか話してみよう)。次はグループで話してみよう(自分たちペアの意見と同じならそれをグループの意見として発表しよう。違ったらまた話し合ってみよう)。学級全体で話してみよう。手を挙げて発表する。黒板に書いて発表する。本年度から導入されたタブレットで発表する。瞬く間に生徒一人一人の意見・グループの意見が集約される。先生が褒めてくれる。学級のみなが拍手して共感してくれる。素晴らしい成功体験が毎時間各教室で繰り広げられている。

先日、学級弁論大会が実施された。タブレットに書かれた原稿を発表する生徒、原稿用紙に書いた文章で発表する生徒。今大きな声が出せない生徒は、タブレットの作文を大画面に表示することで発表し、考えがまとまらなかった生徒は、構想や骨組みのみ(今できていたところまで)を画面に映し出しての発表。全員大拍手であった。「さすが私の大好きな赤中生」(校長講話の締めくくりは、必ずこの言葉である。)



サイクリング理論

国分北小(始) 道 添 辰 也

「教師生活二十五年……」子どものころによく見たマンガで、年配の教師がよく口にしたセリフである。気付くと当時の彼より十年も長く教師生活を送っていることになる。その間、たくさん先輩から指導・助言をいただき、成功したスポーツ選手や文化人、歴史上の人物の名言・遺訓に感銘を受けてきたのだが、若手の先生たちに話をすることも多くなった今、その言葉の中で、さも自分で考えたかのように伝えているのは、教員一年目に御指導いただいた話である。初任研だったのだろうか、隣の小学校の教頭先生に尋ねられた。

「サイクリングに行くとして、どげな幅の道路を選びたかね？」
当然のことながら、狭い道よりは広い道の方

が気持ちいいし、何より安全である。どのよう
に答えたかは覚えていないが、続けて、
「じゃあ、そん道をどいだけ使っちゃっけ？」

改めて考えると自転車のタイヤ幅は五センチ程度であり、物理的に考えれば、地面に接しているのは十センチ弱だろうし、五十センチもあれば、実際に走れないことはなさそうである。「そげな道で景色を見ながら、サイクリングが楽しむことがでくっけ？」

教頭先生は、私(たち)の知識・技術の浅さ、教材研究の不十分さをサイクリング中の道幅に例えて指導してくださったのだった。

「広か道でも、つこ部分はちーつとかも知れん。でも使わんゆとり分があつて、風にあおられたい、とっさに何かが起きたいしても、余裕をもつて楽しゆサイクリングがでくつたつどね。授業も一緒。これからずんばい学び、話を聞き、本を読み、授業に必要なことはもちろんのこと、物事の背景、出来事のきっかけ、理由など、授業には一見関係なさそうなことも身に付けないかん。それで広か道を作り上ぐつことができるとき、子どもたつの心に届く楽しか授業がでくつたつど。」

現在の私の頭の引き出しには、三十五年分の役に立つかどうか分からないものでいっぱいである。何か一つでも引っ張り出して、後進の広い道作りに役立てられないかと考えるこの頃である。

先生は職員室に行ってください

深川小(隅) 松 元 美 和

初任校の四年目。三学期も押し迫る頃だった。「先生は職員室に行ってください。」

とドアが閉められ、私は子供たちから教室を追い出された。「なんなの。」としぶしぶ職員室で仕事をした。

チャイムが鳴り、教室に戻ると、女子がしくしく泣いている。

「男子がふざけて話合いになりません。」

文集の話合いだと思い、

「協力しない人は、文集をもらう資格はない！」と、男子を一喝した。すると女子が、

「先生、違うの。先生がもう最後だから、お別れ会をしよう」と、みんな話合ってたの。」
ジーンときたが、それ以上に、自分たちの力でやろうとする子供たちの姿を見張った。

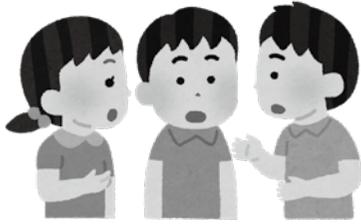
まだ子供の感覚に近かった私は、授業や学校生活で子供たちがやってみたいということの可能性を限りやらせていた。今なら「危ないから」衛生的に心配だから」とストップをかけただろう。失敗もたくさんあったが、感動も多かった。そうするうちに、学習発表会の学習劇の台本や小道具作り、演劇指導など、様々な役割分担を自分たちでやってのけた。小学生にこんな力があるのかと驚きの連続だった。教師の手を離れて、

自立していく子供たち。それがその後の私の目指すところとなった。

尊敬する人生の先輩に「シビレイイは自分がしびれているから相手をしびれさせられる。子供の最大の教育環境は教師自身である。」と教わった。自分も自由な発想でチャレンジすることを楽しみ、教師であるうちは常にシビレイイでありたいと思ってきた。

しかし、職場での責任が増すにつれ、いつしか子供の発想を「常識」という基準で却下している。「先生はあっち行ってください。」と言われる腹の据わった学校経営ができるようになりたい。もちろん安全対策は抜きなく。

職員もまた同様であろう。自分の持ち味を生かして力を発揮することは仕事の喜びであり、子供たちにつながる。どこまで職員の発想を生かしているのか、自問自答の日々である。



「教育的な配慮はなかとかなあ」

伊集院北中(日) 淵 脇 広 智

教育に携わって十四年目のことである。私は、種子島のある中学校で野球部の監督として采配を振るっていた。三年生にとっては集大成とも言える最後の大会、県大会出場をかけての地区大会の時である。初戦は、これまで勝ったことのない中学校。「絶対に負けられない。この試合で勝って、決勝は三年生チームで悔いなく試合をさせよう。」そう思った私は、ファーストとセカンドに二年生を起用した。最後の地区予選とあって気合い十分の試合を展開し、最終回まで勝敗が決まらず、促進ルール(満塁の状態から始めるルール)が適用された。先攻の我がチームは、無得点で終わり、その後、キャッチャーのパスボールであえなくサヨナラ負け。あつけない幕切れであった。

試合後しばらくして、三年生のある母親が「なんでうちの子を出してくれんやった。いつも見に来れん父親も今日は応援に来とったのに。なんで。」と涙ながらに訴えてきた。感情をむき出しに訴えてくる母親の前に、「この試合をどうしても勝たせたくて。」としか言えなかった。これまでどの保護者からも信頼されているという奢りがあったのかもしれない。やはり、三年生を起用すべきだったのか。いろいろと考えそ

の日は悶々とした気持ちで帰路についた。

ある日、野球部のお別れ会があり、生徒・保護者が集まった。生徒一人一人がこれまでの反省を述べ今後の抱負を発表した。最後の大会で出場できなかった三年生二人の顔をまともに見られない自分がいた。あの母親の姿が脳裏に焼き付いて離れない。その日は、珍しくその生徒の父親が参加していたので、思い切って声を掛けた。「試合を見にきてくださってありがとうございます。ごさいます。〇〇を起用できなくて申し訳ございませんでした。」父親は、「仕方がなかよ。勝たせたい先生の気持ちは分かる。でも教育的な配慮はなかとかなあ。」感情を押し殺しながらも穏やかに話す父親にうなづくことしかできなかった。

それ以来、ことあるごとに「教育的配慮」という言葉が頭をよぎるようになった。生徒の背後には保護者がいるのである、保護者の我が子への深い思いを忘れないように全ての教育活動に配慮がなされるよう職員にもお願いしている。

逢うべき人

財部中(隅) 濱 田 津世志

「人間は一生のうちに逢うべき人には必ず逢える。しかも一瞬早すぎず、一瞬遅すぎない時

に。ただし内に求める心なくば、縁は生ぜず。」ある教育長の講話に頻繁に出てきた哲学者・教育者の森信三氏の言葉である。

人生は不思議なものである。無数の偶然の出逢いの積み重ねで、人生はできているのではないだろうか。まさに縁である。自分自身、これまでを振り返ってみると、人生の分岐点で、確かに逢うべき人に逢っていた。自身に内に求める心があったとは言い切れないが、多くの縁を結ばせていただいた。それらの出逢いのおかげで、様々な経験をすることができた。今後もし出逢いを大切にしていきたいと、改めて考えさせられる言葉である。しかし、逢うべき人に逢っているのに、その出逢いに気付かない自分がいたかもしれない。せっかくなの出逢いを、チャンス・運命の出逢いにするために自分を磨き続けなければと思う。

反対に、自分自身は逢うべき人になり得ているのか?とも考えさせられる。これまで様々な経験はさせてもらったが、他者が求めることに對して、果たして応えられるだろうか。もつと人間の幅を広げ、見識等も深めなければならな

いとつくづく感じる。

出逢った人の人生に大きく関わる時が、いつやってくるか分からない。人とのつながりや出逢った人との関係を大切にしよう心掛けていくが、自問の毎日である。出逢った人から、「出逢えた人」と受け止められるよう日々精進していきたい。

ある日の校長講話



誕生日は、母苦難の日

陵南小(始) 牧 哲史

誕生日には、こんな考え方もあるんだと思っ
て聞いてください。みんなは自分の誕生日がく
ると、ケーキを食べたりプレゼントをもらった
りしてワクワクしますね。

ある時、本を読んでいたら、こんなことが書
いてありました。皆さんは水戸黄門を知って
いますか。その水戸光圀さんは「天下の副將軍」
だから、誕生日にご馳走を食べようと思えば、
いくらでも食べられます。でも、自分のお母さ
んが亡くなってからは、誕生日は、毎年、お粥
と梅干しにしました。家来が理由を聞くと、「誕
生日は、母が生涯でこれ以上はないというくら
いものすごい思いをして、私を生んでくれた日
です。そんな日にお祝いしようとは思わない。

今日は亡き母を思い出す日です。だから、お粥
と梅干しで十分です。」と。そうなんです。誕
生日は、自分のお母さんがすごい苦しい思いを
して、自分を生んでくれた日なのです。だから、
「ケーキ買って。」「プレゼントちょうだい。」な
ど「あれしてこれして。」と言うのもいいけれ
ど、お母さんに「私を生んでくれてありがとう。」
と言う日なのです。もちろん、お父さんがいな
いと、みなさんは生まれていません。お父さん
に「ありがとうございます。」と伝えてください。
お父さんのお父さんとお母さん、つまり、お父
さんの方のじいちゃんとおばあちゃんがいなかっ
たら、お父さんは生まれていません。お母さん
のお父さんとお母さん、つまりお母さんの方の
じいちゃんとおばあちゃんがいなかったら、お母
さんは生まれてきていません。だから、おじい
ちゃんに、おばあちゃんに「ありがとうござい
ます。」と伝えてください。

このように、命はつながっているのです。み
んなもやがて大きくなり結婚をして子どもがで
きたら、命がつながることになるんです。

私も誕生日のときは母に感謝を伝えるように
しています。してもらったことばかりではなくて、
お礼を言う日なのです。誕生日の話でした。

蓬も麻中に生ずれば

扶けずして直し（荀子）

出水中（北） 林 博 光

雑草の中に茂っている蓬という草を見たことがありますか。蓬は自然に生えると、複雑に枝を張って伸びていきます。一方、麻という植物は少しも歪むことなく、天に向かってまっすぐに伸びます。

自然に生えた蓬は、曲がりくねって生長しますが、麻の中に交じって生えた蓬は、特に支えをつけることなどしなくてもまっすぐに伸びていきます。

私たち人間も同じです。目標がしっかりと置いていて、いつも自分に自信を持って生活している人は、麻のように真っ直ぐな心を持ち、生き生きと、意欲的に活動ができるものです。

このような麻のような真っ直ぐな心を持った、大勢の友達の中で生活していると、誰でも自然に、素直で、真っ直ぐな心の持ち主に成長していくものだと思います。

令和三年度も半分を終えようとしています。今日まで、皆さんは明るく、素直な心をもったたくさんの方の友達の中で真っ直ぐな心を大切に育

ててきました。

途中で、教科の学習につまずいて、つい自信をなくしてしまった人や、あるいは友達と些細なことではけんかして、友達を大切にしようという気持ちを、忘れてしまった人もいたかもしれません。また、部活動等でスランプになつてしまい、悩んだり、意欲をなくしてしまったりした人もいたかもしれません。

でも、そんなとき、皆さんの周りに、いつも生き生きと、意欲的に行動する友達がいてくれたら、自分の心を真っ直ぐに立て直して、頑張ろうという力が湧いてくるものです。皆さんは、麻のような真っ直ぐな心をもった友達に支えられて、健やかに、伸び伸びと成長を続けてきています。頑張っている皆さんですが、それを支えてくれるのは友達であり、先生であり、家族であり、地域であり、学校です。

天に向かって真っ直ぐに伸びる麻のように学校で生活できていることに、感謝しなければなりません。

今日から半年後、皆さん一人一人が、生き生きと、さらに美しく輝いていてくれることを心から願っています。

自分の足下を掘れ そこに泉がある

与論高 甲 斐 修

先日の総合的な探究の時間では、一・二年生が地域の方々との対話会を行いました。自分にとっては身近な大人や見慣れた地域の取組であったとしても、対話を重ねることで、その魅力や一つ一つの存在の意味に気付くことができたのではないのでしょうか。

十九世紀ドイツの哲学者フリードリヒ・ニーチェは、次のような言葉を遺しています。

「きみの立っている場所を深く掘り下げてみよ。泉はその足下にある。ここではない何処か遠く場所に、見知らぬ異国の地に、自分の探しているもの、自分に最もあったものを探そうとする若者のなんと多いことか。実は、自分の視線が一度も向けられたことのない自分の足の下にこそ、汲めども尽きせぬ泉がある。求めるものが埋まっている。自分に与えられた多くの宝が眠っている。」（『超訳 ニーチェの言葉』白取春彦 編訳／デイスカヴァー・トゥエンティワン）

自分の足下を掘るとは、自分の手元や身近にあるものに価値を見だし、その価値を信じて生かし切ることです。例えば、探究の取組を通して、一人一人が地域を知り、その良さや課題

を発見し、解決に向けて深く考えることもその一つです。あるいは、「自分はどうか生きたいのか」ということを突き詰めて考え、そのために現在の自分が何をすべきかを見いだし、行動に移すことも、ニーチェの言う、汲めども尽きせぬ泉を発見することであり、自分に与えられた多くの宝を手にもつなげるのです。

どのような理想や目標を掲げるにしても、今の自分から始めるしかありません。きょう自ら行ったことのみが、明日の自分をつくります。今の自分の現状を謙虚に受け止め、こつこつと地道にやり続けたその先に、自分にしか到達できない泉があるのだと思います。

終業式まで残り一か月を切りました。自分の足下を掘り下げ、悔いの残らないよう毎日を大切に過ごしてください。



時代を超えても常に教師に求められているもの

桜丘東小(市)

脇坂郁文

「どんな子どもに育てたいのか」。駆け出しの私に向けた先輩からの一言であった。

は、目の前のことに一生懸命であった。自分の力を出し切ることが、子どもたちの豊かな成長につながるものであると信じ、自分が身に付けてきた知恵や方法などを伝えてきた。それは、将来自分自身で生きていける力を子どもたちに育てることを願ったことであった。この言葉が、その後の自分の「教師観」・「子ども観」を形成していく礎になったのは間違いない。

「どんな子どもに育てたいのか」の言葉には続きがあった。「教師が自分の持っている力を全て注いだとしても、自分と同じような子どもしか育たない。自分を乗り越え、自分より優れた子どもを育てるのが真の教師であり、超越す

るための力を子どもに育てなければならぬ。」
『教師を超越する力』とは、一体どんな力なのか、それ以来、自分の心の中で追究してきた気がする。

さて、学習指導要領ではこれからの時代を切り拓く子どもには、①生きて働く「知識・技能」の習得、②未来の状況にも対応できる「思考力・判断力・表現力等」の育成、③学びを人生や社会に生かそうとする「学びに向かう力・人間性等」の資質・能力を培うことが示されている。経済協力開発機構(OECD)は、これらの資質・能力を、「キー・コンピテンシー」(汎用的な資質・能力)として捉え、①社会・文化的、技術的ツールを相互作用的に活用する能力、②多様な集団における人間関係形成能力、③自立的に行動する能力で示しており、①は学習指導要領で言われている「深い学び」、②は「対話的な学び」、③は「主体的な学び」と対応していると考えられる。

三十年以上も前に「どんな子どもに育てたいのか」と先輩の先生に問われたのだが、三十年前と現在も答えは変わらない。

教育では『教師を超越する力』を子どもたちに育てることが求められており、そのためには教師自身が自分を省察する『メタ認知能力』を身に付けなければならない。

勉強の楽しさを 感じさせたい

西原台小(隅)

田中 雄志

これまで多くの授業を参観してきた。意欲的に楽しそうに取り組んでいる子どもがいる。一方で、暗い表情でうつむき、つまらなそうにしている子どもがいることもある。どこの学校、教室でも見かける光景かもしれない。「勉強だから仕方ない」ことなのか。十数年前、自分自身が漢字検定を受けたときに考えたことがある。

当時、漢検を受けようと思った理由は二つある。テレビ番組で漢字クイズをよくやっていて、テレビに向かって回答をしているうちに、自分の漢字能力はどれくらいかなと思つたこと。当時小学生、中学生だった我が子たちが漢字検定を何度か受けていて、どんどん級が上がっていくのを見て、よし自分もと刺激を受けたこと。

申し込んだ後、主催協会のホームページにあつた前年の問題を試しにやってみたら合格には遙かに遠い散々の出来。これはやばいと一か月程頑張つて勉強をして、問題集を二冊こなし。読み・書き、四字熟語など分野別問題集を一通りやった。自分でやると決めたことだから苦でも何でもなかつた。その後、過去問集の一回目をやってみたら、ぎりぎり合格レベルの正答率。嬉しかった。更にやる気が出てきて、過去問集も全てやり通した。勉強が楽しかった。

子どもたちだつてきつと同じ。仕方なくやる勉強、興味のない勉強は、やっぱりつまらない。なかなか身に付かない。逆に、興味がありやる気のある勉強はおもしろい。どんどん力も付く。では、子どもにも「興味をもて。やる気を出せ。」と言つて変わるか。変わるはずがない。「興味をもたせる。やる気を出させる。」のは教師の役目。勉強はつまらないもの、嫌々でもやるべきもの、いつもそう考えて授業をしている教師は多分いないと思うが、子どもたちが興味や意欲をもつて授業に取り組めるようにと、教師が常に工夫して授業に臨めば、子どもの学力は更に高まつていくことは言うまでもないだろう。

どうすれば子どもが興味や意欲をもつだろうか、子どもはどう考えるだろうか、子どもの側に立つて授業を組み立てていく。そうすることで、子どもにも勉強の楽しさを感じさせたい。



覚悟をもつた 学校経営

安城小(熊)

福田 浩一

今から十一年前の十月二十日新任の十月二十日新任校長として奄美市に赴任した際、未だかつて経験した。未曾有の水害といわれた奄美豪雨災害を経験した。

災害当日は、陸上記録会がある予定だったが、雨のために中止になっていた。しだいに雨脚が強まり、パソコンの雨雲レーダーには、見たこともない真っ赤な画面が映っていた。

ごく平凡な一日のはずが、突然生き物のように荒れ狂い降り出した雨が日常を一変させた。電気も、携帯も途絶えた闇の中、百九人が小学校に避難してきた。隣接する中学校の生徒、保育園児、行き場を失った人が次々に避難してくる。

「明るいうちに食料の確保をしなければ。」自校式の給食室にあるすべての米を職員に炊かせ、味噌汁を作るように指示した。子供たちの寒さをしのぐためにカーテンや段ボールを身にまとわせ互いに体を寄せ合せて眠らせなければならぬことを、いったい誰が予想しただろう。逃げ出したくなるような現実と、避難してきた人たちを守らなければならぬ職責の重み。それまでに私の持つていたちっぽけな正義感は、簡単に引き裂かれてしまった。

数日後、自宅を見に行くと教頭住宅は屋根まで水没し、すべての家財道具は失われていた。

啞然とする暇もなく、支援物資の服を身にまとい避難されている方々のお世話をした。贈られてきた物の中には「ガンバレ」と縫われた雑巾もあった。

避難所での仕事をしながら学校再開に取り組みんでいたある日。あの日の豪雨が嘘のように真っ赤な夕日が差し込む職員室に一通の手紙が届いた。中をあけてみると、教職員仲間からの激励の手紙であった。「先生の姿をテレビで拝見しました。誇りに思います。」短い文章と二十数人の懐かしい名前があったが、涙でかすんで思うよう読み取れなかった。

先日テレビで、大雨の被害から学校再建に尽力されている福岡県の先生方を拝見した。忘れていた奄美での思いが蘇ってきた。あの時、励ましてくださった方々に改めて感謝するとともに、貴重な経験を忘れず、今後も覚悟をもって学校経営を行う決意を強くした。



読書案内



■向田 邦子・向田 和子 編

向田邦子ベスト・エッセイ

喜念小(大) 阿部 由美

この本を書店で見かけたとき、実家に帰ればまだどこかにあるはずだと思った。だから一度は通り過ぎたのだが、店内をひと回りしてやはり手にとっていた。

高校生のころから向田邦子のエッセイが好きだった。「父の詫び状」「字のない葉書」「ごはん」は特に好きで受験勉強の合間によく読み返していた。特別ではない普通の出来事、どこか家庭でもありがちなありふれた日々の様子が言葉巧みに綴られている。不思議なもので読んだあと必ず誰かに「うちでも昔、こんなことがあったね。」と話したくなる。

例えばこうだ。

私は小学五年生の時、東京から鹿児島に引越してきた。鹿児島言葉、食べ物、桜島の降灰と何から何まで初めてのことばかりだった。なぜ登校できなくなったかは今となっては自分でもよく分からないが、転入してすぐ「登校拒否」をして親を慌てさせた。退職前の担任の先生にも迷惑をかけた。懐かしいとも言えなくはないが少しつらい思い出もある。四年生で鹿児島に来て多くの楽しみを知り、鹿児島は第二のふるさとと言っている向田邦子のことをもっと早く知っていたら、私の「登校拒否」はなかったかもしれない。

「向田邦子さん、亡くなったって。」

と母と夕方のニュースを見て驚いた日から四年が過ぎた。もし彼女が生きていたらもっと楽しいエッセイや物語を読むことができただろうと残念でならない。

しかし、四十年過ぎたのだ。父は故人になり、母は何くれとなく兄たちの世話になり、自分も退職後のことを思い描く日々だ。コロナにインフルエンザは心配、子どもたちは明日も元気に登校するだろうかと考えることが多い毎日だが、ときにはゆつくりと昔読んでいたエッセイ集を読むのも悪くない。きつと新たな感覚で読めるはずだ。

ちくま文庫 九〇〇円＋税

いつか読んでみたかった日本の名著シリーズ⑫
啓発録

明和(中)市 立 山 佳 人

前任地の枕崎市で県外研修視察の機会をいただいた。全国学力学習状況調査において高い成果を残している秋田県・石川県・福井県などから学力向上や小中連携を学べる学校を視察できることになり、福井県二校、石川県一校の計三校を視察した。それまで、日本の歴史に興味がある方ではなかったが、初めて訪問する所でもあり、できれば歴史も学びたいと思い、幕末の頃に福井藩士「橋本左内」なる人物がいたことを調べ、出発した。

福井市立美山中学校の視察後半に、橋本左内を話題に出したところ、偶然にも「橋本左内展」が市内で開催されていることを教えていただき、当学校の校長と二人で出かけることになった。その会場で手にしたのが「啓発録」である。

橋本左内は、幼少から俊秀の名高く、蘭学・医学を学ぶ。藩主松平慶永に認められ、藩政改革に尽力。將軍継嗣問題では一橋慶喜擁立に尽力。安政の大獄で斬罪に処された。わずか

二十五歳にして幕府に処刑された激しくはかない人生だが、彼が影響を与えた人物には、ほぼ同時期に処刑された吉田松陰や薩摩の偉人「西郷隆盛」など幕末の英雄たちが並ぶ。その左内の代表作が「啓発録」である。

この著書は、第一章〜第五章で構成されているが、十五歳の時に自らの大志を忘れぬように残し、それを若い武士たちに向けて発信した書物であるため、第一章「啓発録」現代語訳は、中学生でも読みやすいレベルであり、立志式などで活用したこともある。第三章「学制に関する意見文書」や第四章「為政大要」は、教育改革や「世界と対等にわたりあえる日本人」への課題を述べてあり、現代人にもそのまま当てはまる。時代背景からやや過激ではあるが、民の上立つリーダーがどうあるべきかについて述べてあり、校長としての考え方に参考になるものである。二十代半ばの青年が書いたものであることにたいへん驚かされた。

また、この著書を読んだ後に「西郷どん」の放映があったので、ドラマも興味深く観ることができた。

致知出版社 一四〇〇円＋税

からすたらう

有明中(隅)徳 永 虎三郎

この絵本は、約三十七年前、新採一年目の夏、帰省後しばらくして、下宿先に父から送りつけられたものです。以来、座右の書の如く、異動先に持ち歩き、一年に幾度か手に取りますが、何度読んでも「頑張ろう」と元気をもらっていますが、本です。どのようなタイミングで手に取るかは定かではありませんが、読後に、いわゆる教育の理想や力、原点を感じられる本ですので、何らかの迷いをリセットしたい時であったのかな、と振り返るところです。

さて、著者の八島太郎氏は南大隅町(旧根占町)出身で、鹿児島県では触れる機会の多い絵本と思われれます。内容は、小学校の生活になじめず、教師や級友からも軽んじられる存在であった「ちび」からすたらうが、児童一人一人を大切な存在として受け入れるいそべ先生(恩師二人がモデル)との出会いにより、カラスの鳴き真似を学芸会で披露することとなり、結果、学校、ひいては卒業後の地域社会での居場所を得るといってお話です。

好きな挿絵のページがあります。二十一ページの「先生は、まわりに だれも いないとき、ちびと ふたりだけで はなしをすることがあります。」です。そして、胸が詰まるページがあります。二十七ページ「(前略)日の出とともに いえを でて、にちぼつ いえにかえりつきながら： まいにち まいにち 六ねんもの あいだ」です。かつて、二回ほどこの本の読み聞かせに挑戦し、この傍線部で、胸いっばいとなり、以降、読み聞かせは断念したことを思い出します。

先日、偶然、ハンセン病人所者のための全国唯一の高校であった新良田教室の手記にふれ、教育現場でも差別が厳然とある中、深い人間愛と確かな見識の上に、常に生徒の傍らにあり、生徒のその後の人生に勇気や希望、生きる力を育み導いた一人の教師の存在を知りました。「いそべ先生」と重なります。教師としての矜持を感じ、元気をもらえる絵本だと思います。

偕成社 一八〇〇円



■藤子・F・不二雄 著

ドラえもん

鹿大附属特別支援 奥 政 治

本書は、のび太さんと二十二世紀の未来からやってきたネコ型ロボットのドラえもんが繰り広げる日常生活を描いた作品である。

のび太さんは、勉強やスポーツが苦手な小学生。不注意が多く、優先順位を判断することも苦手で、宿題よりも遊びを優先する。また、気になることがあるとぱつと飛びついてしまう衝動性もある。さらに、「どうせぼくなんか。」と発言するなど、自己肯定感も低い。その一方で、優しく、面倒見がよく、正義感が強いなどのよさもたくさんある。

現在では、特別なニーズがある少年であると思われる。頑張らなくては、頑張ろうと思っただけでもうまくいかないのび太さんに、ドラえもんという強力な支援者が現れる。様々な支援ツールを提供し、のび太さんの自立に向けた行動をサポートする。

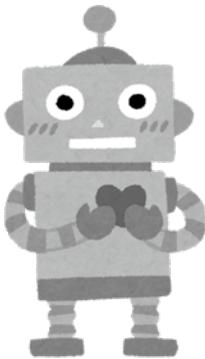
この支援ツールは、安易に使用したり、不適切に扱ったりするとしつぱ返しを受けるものもあり、使用する側のモラルが問われるものでも

ある。ICT活用が進んだ現在では、作中のツールに近い物も実現化されており、作者の発想力には感銘を覚える。

のび太さんの周囲には、日常では様々な関わり方をしながらも、いざというときにはのび太さんを支えたり、チームとして活躍したりする仲間もいる。この仲間の存在が、のび太さんの成長には欠かせない。

特別なニーズがある児童生徒が増加している今日、ドラえもんのように、その子の気持ちに寄り添って、実態に応じた支援ツールを使いながら、理解者と共に学習上や行動面の困難さを克服する指導・支援が、学校では求められている。特別支援教育の観点から、改めて、一読されてみてはいかがでしょう。

小学館 各巻四五四円＋税



「地区の代表として、県民体育大会、頑張ってきました。」

仕事終わりや休日の練習を思い浮かべながら、選手全員で意気込みを語り、多くの方々から激励を受け、参加すること九回。どれも心に残る思い出だ。

中・高六年間、卓球部に所属し、仲間と競い合い、心身の成長と技術の向上を目指した。充実した時間だった。大学と勤務校二校目までは、地域のチームや卓球連盟に属さず、本格的な練習はしていなかった。三校目勤務時にチームや連盟の方々の練習に参加して、それから本格的に取り組み始めた。夫婦で小学校教員をしていて、日々の生活に追われる毎日だった。だんだん家庭生活や校務にも慣れてきたが、日頃の運動不足や夢中になれるものがないことを感じていた。家庭、仕事、卓球とメリハリをつけた時間が有意義で、楽しく感じるが増えてきた。

初任校の出水地区（阿久根市）では、同僚と一緒に全九州教職員卓球大会の団体戦に出場した。その後、肝属地区（旧大根占町）、南薩地区（南さつま市、枕崎市）、大島地区（和泊町）、鹿児島地区（日置市東市来町）、そして現在は、大島地区（瀬戸内町）に勤務している。これまで全九州教職員卓球大会には鹿児島教員団の一員として何回か出場したが、地区大会に参加するようになったのは南薩地区大会からだ。そ

れからずっと趣味（特技）として取り組み十八年、今に至っている。

地区大会は、県民体育大会の予選として開催され、卓球競技は、本大会同様の団体戦（五シングルス「一般・三十代・四十代・五十代・六十代」と年代別個人戦が行われる。優勝したチームや個人が、県民体育大会の出場権を獲得する。現在は、毎年、競技会場が固定されているが、以前は、「県民体育大会〇〇大会」というように開催地区が持ち回りで行われていた。開催地区の多くの方々が、大会運営に関す



「いい汗流して、関わりを広げ、楽しむ」

薩川小（大）

小牧 正 孝

るサポート等をしてくださった。心温まる声かけもいっぱいあった。勝敗同様、多くの方々の交流も心に残り、大会を通して、他地区の選手や関係者と知り合いになったり、再会を約束したりすることもできた。特に大島地区では、県民体育大会大島地区大会は、郡民体育大会（郡体）の愛称で親しまれている奄美群島最大のスポーツイベントで、どの競技も大盛り上がりだった。開催地は持ち回りで、開催場所への移動も大変なこともあった。移動の船での語らいや懇親などもなつかしい思い出。試合が終わればみんな仲間、「また来年。」と声をかけて別れる。好きな卓球を通じた仲間の絆が深まる。

各地区では、平日（主に火・木）の夜と週休日に二〜三時間、卓球愛好者（激しい練習をしたい者）が男女年代を問わず集まり、県民体育大会や地区大会、その他の社会人大会での入賞を目指して練習に励んだ。いい汗をいっぱいかいて、先輩や後輩、いろいろな職種の人たちと関わりながら多くのことを学んだ。コロナウイルス対策を考えて練習を工夫しているが、新しい出会いと発見が楽しみだ。

これまでの勤務校で、サッカー、バレーボール、緑の少年団、少年少女消防クラブ（毎年、

出初め式で訓練操法等披露）、自転車（交通安全子ども自転車安全運転競技大会県大会四年連続優勝、トータル十何連覇中の一部として、四年連

続全国大会へ）等の少年団活動に関わらせていただいた。子どもたち、保護者、育成者、地域関係者、交通安全協会の方々と一緒に、汗を流して、知恵を出し合って、子どもたちのために取り組んできた。今の自分にもすごくプラスになっていると実感する。

わたしたちの生活は、物質的に豊かで便利になってきたが、難しい問題も増えてきている。スポーツだけでなく、いろいろな活動を通して、関わりを広げ、学び、多くの人の笑顔と生き生きとした姿が広がることを目指したい。



伝統の息づく山下小学校

山下小(北) 重 信 廣 行

一 山下三尺棒踊り

「オーセーへーローホオホオホオ、サアーサ。」

唄者が前唄を唄い、サアーサの子供たちのかけ声とともに手踊りが始まる。左中右で踊りが異なり、時折棒を打つ一点に動きが集約される。「カンカンカン」と棒を打ち合う音が響き、一団の動きが流れていく。手踊りと棒踊りの流れる所作は見応えがある。

「山下三尺棒踊り」である。棒踊りは、島津藩が強兵策の一つとして農民を訓練するために進めたとされ、この地に伝わってきた。戦前までは市内各地に残っていたようだが、その後途絶えていた。昭和四十九年に「山下三尺棒踊り保存会」により復活され、山下小の児童に連綿と受け継がれている。三尺棒を

腰に差し、黒のかすりに白はちまき、赤たすきの装束で、足袋にわらじを履く。例年、夏休み中に保存会のお師匠さんたちに指導を受けながら練習を行い、運動会や敬老会で披露している。

二 山下小学校

山下小学校は、児童数三十二人、五学級の小規模校である。学校のシンボルツリーはイチヨウで、記録によると樹齢は百年ほどの大木である。イチヨウは学校のキャラクター「山下まもるくん」として子供たちに親しまれている。児童数は年々減少しており、令和四年度からは完全複式となる見込みである。子供たちは素直で明るく、保護者・地域ともに学校への協力を惜しまない地域である。

三 山下の由来

山下の由来は、鎌倉時代この地を統治した豪族、莫称（あくね）氏が、現山下小の東南にある愛宕山（標高一九六メートル）に山城を構え、その城の麓ということで「山下」と呼んだと言われている。実際、山下の長老たちは愛宕山を現在も城山と呼んでいる。愛宕山の中腹には、防塁の跡（石垣）が見られ、山頂からは、阿久根市街から長島・東シナ海まで広く見渡すことができ、眺望に優れている。山下小の校地は、莫称氏開山の浄土宗宝

珠山阿弥陀寺跡であり、山下小から南側道路沿いが昔の馬場で、古い石垣の街並みが残っている。

四 英称から阿久根へ

山下を含む阿久根市の歴史は古く、石斧の出土から遡ること縄文時代に至る。古くから人々が定住し、交通の要衝でもあった。記録に残るのは、平安時代に編纂された延喜式の中に、宿駅としての英称（あくね）駅が最古である。鎌倉初期～室町初期まで山下を拠点とした豪族は、前述した莫称（あくね）氏である。鎌倉幕府の御家人であり、成兼を初代とし八代に渡り統治した（初代～三代の供養塔が山下小の近隣に現存する）。室町中期になり、薩州島津家初代島津用久が統治した。用久は莫称を阿久根と改め、現在につながっている。

五 おわりに

現在、南九州西回り自動車道（阿久根～水引）の工事に当たり、道路予定地の発掘調査が行われている。調査が終了した場所からは遺構や遺物が発掘されており、見学会も予定されている。興味のある方は参加されてはいかがだろうか。

*** こころの詩 ***

郵便局の椿

あかい椿が咲いていた、
郵便局がなつかしい。

いつもすがって雲を見た、
黒い御門がなつかしい。

ちいさな白い前かけに、
赤い椿をひろっては、
郵便さんに笑われた、
いつかのあの日がなつかしい。

あかい椿は伐^きられたし、
黒い御門もこわされて、
ペンキの匂うあたらしい、
郵便局がたちました。

金子みすゞ

一般財団法人校長会館だより

教育長異動

○再任 令和三年十二月十日付

南さつま市 北園 博之氏

○再任 令和三年十二月二十六日付

屋久島町 塩川 文博氏

○再任 令和四年一月二日付

喜界町 久保 康治氏

季節の言葉 「注連飾る」

煙筒に注連飾して川蒸気

高浜虚子

新年に年神さまを迎える準備として、注連縄を張り神聖な空間を示す。その土地によって飾るものも少し異なるが、穂俵や昆布など縁起のよいものが多い。また飾る場所も玄関や神棚のほか、台所や竈など様々である。一日飾りはよくないとされ、暮の三十日までには飾る。

編集

後記



借家の庭に今年も柿がなっています。柿は鈴なりです。私たち夫婦は、この柿のことを数年前までは、食べないままに「渋柿」だと思いついていました。

ところが、ある日、大家さんがやって来られて、「庭の甘柿を少し収穫したい。」と言われました。私は、思わず「この柿は、渋柿ではないのですか？」と反応しましたが、実のところは甘柿だったようです。私は、これまでの数年間、これらの甘柿を無駄にしていました。その後は、毎年、百個くらいの柿を収穫し、大家さんに配った後は、細切大根にマヨネーズと和えるなどしながら、おいしくいただいています。

なぜ、私は、これらの柿を渋柿だと思いついていたのでしょうか？ 考えるに、私の実家にあつた柿の木が「渋柿」であつたことが理由だったかもしれせん。また、幼い頃に友人にだまされて食べた柿の苦い経験もあるのかもしれませんが。

学校経営の判断もそうですが、思い込みや経験によって間違ふことのないように気を付けたいと思います。

最後に、御多用の中、原稿をお寄せいただいた皆様方に心から感謝申し上げます。また、会員皆様方ますますの御健勝を祈念申し上げます、編集後記とさせていただきます。

塚元宏雄（平川小学校）